

長尾クリニック 長尾和宏院長



在宅医療ステーションを設置して365日24時間体制で在宅医療を行っている。

名医の診察室

人間は最期をどのように迎えるのか——。現代医療は延命治療こそが至上命令で行われている。そのような中において、人々の「平穏死」に手を携える信念の医師がいる。
(医学ジャーナリスト・松井宏夫)

延命治療が至上命令の今こそ...



「平穏死」への信念

「平穏死」を人々により広く知らしめたことで有名なのが、長尾クリニック(兵庫県尼崎市)の院長(兵庫県尼崎市)の長尾和宏院長(56歳、東京医大卒)である。

「平穏死」とはその言葉通り「平穏に最期を迎える」ということ。今日の病院では、どのように死を迎えるのは難しい。それは、最後まで延命治療が続くからである。

在宅医療を受けている患者数は約3000人。これまでに約7500人が在宅での平穏死。しっかりと長尾院長が看取(みと)ってきた。

「一年間に80人くらい看取ります。ちなみにこの年末年始にも4人のお看取りがありました。10年という長く診させていた患者さんもいて、いろんなことを教えていただきました。」

このように話す長尾院長の顔には、充実感に満ちています。在宅患者の診療をする長尾院長。街そのものが病院なのだ。

在宅医療ステーション

「私たちに

は街が病院なのです。在宅の方が入院患者さんとするより3000床。そして外来診療も行っていきます。だから、尼崎の「街の病院」です。」

長尾院長が在宅医療にまい進するのは高校生時代の父の死が起点にある。

「入院するたびに病状が悪くなる。父が亡くなったとき、病院は何のためにあるのだ」と子供心に思いました。病人を診ていないのです。私は人を診る医者になろうと思いましたが、原点は現代医療への「怒り」です。そして、もう一つは医師になりたてのころ、患者さんの最後の願いにこたえたくてもこたえられなかった、患者さんへの

原点は現代医療への怒りと患者さんへのざんげ

私の「ざんげ」

その長尾院長に平穏死を教えた患者が、医師になって10年目に現れた。50代の男性患者で、末期の食道がんだった。「全ての治療を拒否されました。結果的に穏やかに、3か月くらいはほとんど何も食べずに水だけで枯れるような最期を迎えられました。」

そして、クリニック開業。「私は病める人々を家族ごと丸ごと支える医療を目指しています。」

「外來や在宅で初めて出会う患者さんは、服用されている薬があまりに多いのです。同じような薬が出ていることはしょっちゅうです。薬(くすり)は反対から読むと「リス」です。薬を減らすだけで状態が良くなる患者さんがたくさんいます。」

「多剤投与」は社会問題。糖尿病にしても、食事と運動で70、80%の人は改善します。薬は最低必要な物だけにするのが原則。「その症状、もしかして薬のせい?」(セブン&アイ出版)を書いたのも、多剤投与を町医者として強く訴えたいからです。」

長尾院長の声が響いた。それは医師への訴えでもあり、患者への訴えでもある。

長尾和宏

薬を減らす、やめたら戻った

その症状、笑顔が戻った

薬のせい?!

長尾院長の著書「その症状、もしかして薬のせい?」

長尾院長の著書「その症状、もしかして薬のせい?」